

# 小倉における祭礼形態と都市構造の近代化に関する研究

## －小倉祇園祭巡行路からみて－

山崎 信弥

### 1. 研究の背景と目的

日本の各地には数百年の歴史を持つ祭礼が数多く存在し、その開催地である都市は、祭礼と共にその形態を変えてきた。特に、行列をなして町を練り歩く巡行型の祭礼は、都市の様々な変化と深く関係するものと考えられる。

本研究は、北九州市小倉の小倉祇園祭を対象とし、巡行路に着目しながら祭礼の変遷と都市要素の変化の相互関係について考察することを目的とする。研究方法は、文献調査を基本とし、関連図書や都市の地図および巡行路の図を収集し、情報整理を行なったうえで考察を深めた。都市祭礼に着目した研究は多々見受けられるが、松浦による巡行型祝祭における祝祭空間の構成秩序を明らかにした研究<sup>1)</sup>、中野による小倉祇園太鼓に関する研究<sup>2)</sup>などがあげられる。

小倉祇園祭は、元和4(1618)年に京都の祇園祭を参考にして始まったものであり、当初は神山による祈禱を主軸としていたが、そこから行列風流に重きを置き始め、太鼓を導入してからは徐々に太鼓中心の祭礼へと変わっていったという特殊な経緯を持つ。

この祭礼を調査対象に設定した理由として、小倉祇園太鼓が長い歴史を持つ祭礼であること、巡行路を持っていること、巡行中心の祭礼から太鼓芸中心の祭礼へと移行したという変化の大きさが挙げられる。大きい変化を持つことで、都市との関係性が深いと推測した。また小倉という都市についても、かつて城下町であり、400年という長い歴史を持ち、時代と共に変化をしてきたことから、祭礼との関連性を見つけやすく、本研究に適していると考えた。

### 2. 小倉祇園祭における都市要素

祭礼と都市構造を考察するにあたり、以下の3つの要素に着目して研究を行った。

1つ目は巡行路である。小倉祇園祭において、巡行路は2種類に大別され、神事としての意味合いが強い「御神幸」と、芸術的な側面を持つ「回り祇園」が存在する。2つ目は八坂神社である。小倉祇園祭は八坂神社の例大祭であり、本祭礼においてこの神社は非常に重要だと言える。慶長7(1602)年に小倉城の建設が

始まり、その後元和3(1617)年に八坂神社の前身である小倉祇園社が鑄物師町にて創始した。その後、神仏分離令により八坂神社に改名した。3つ目は御旅所である。御旅所とは御神幸の中継地点のことであり、当初は須賀大神が祀られている三本松という場所に設定されており、管理は馬借町によって行なわれていた。

### 3. 小倉祇園祭からみた都市空間の変遷

#### 3. 1. 巡行路と都市空間の関係性の考察

江戸時代から現代における小倉の都市空間の大きな変化を巡行路の変遷とともに図1にまとめた。

まず、江戸時代の小倉は細川氏、小笠原氏が治める小倉城を中心とした城下町であり、中央の紫川を挟んで東側を東曲輪、西側を西曲輪といい、さらに鑄物師町あたりの地域は帯曲輪と称される(図1)。巡行路を見ると、神事である御神幸は町人地を通る一方で、武士に見せるために行なわれていた芸術的な側面を持つ回り祇園は小倉城周辺の武家地を通ることがわかる。また、小倉を東西に分ける紫川には、北側に常盤橋、南側に豊後橋が架かっており、巡行の際もこの二つの橋を通過し、日常生活と祭礼の両方において重宝されていることが考えられる。

明治維新以降、小倉祇園祭は武士中心だったものから町人中心で行なわれる祭礼に変わり、回り祇園も町人地を通るように変化した。かつて小倉城とその周辺の武家地は軍用地となり侵入ができなくなったため、西曲輪の巡行路は旧町人地へと変更されたのである。また、陸軍橋(のちの紫川橋)や勝山橋などの新たな橋が設置され、常盤橋は鉄橋に改築されるが豊後橋とともにその役割が低下し、豊後橋は消失した。軍用地と橋という2つの理由により、巡行路は小倉の中央部から南部にかけての地域を回らなくなり、巡行範囲が縮小された。明治後期になると、鉄道が敷かれ、小倉駅が設置されたことで、帯曲輪が線路で区切られ、巡行に影響が出たと考えられる。

大正から昭和にかけての詳細な巡行路は不明だが、規模が縮小され、御旅所を通らないものに変更したとされており、昭和初期にはついに回り祇園そのものが消滅した<sup>註1)</sup>。都市の変化としては、紫川の周辺に埋

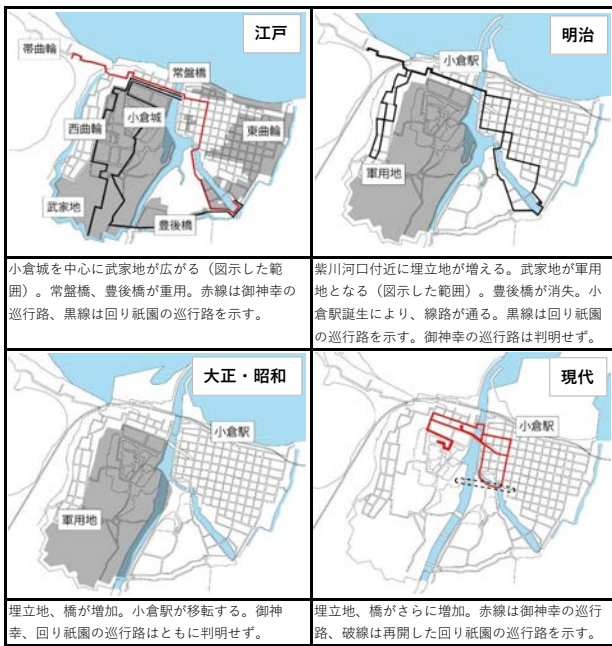


図1 巡行路と都市空間の変遷<sup>註2)</sup>

立地が増加して川幅が縮小したこと、中の橋や紫川大橋などが新設され、常盤橋が石橋に変化した。さらに、都市の中心地である小倉駅が現在の位置に移転することとなり、旧駅の地域の人口が減少したため<sup>註3)</sup>、その周辺の町は祭礼に参加しづらくなるとみられる。

現代に近づくにつれ、埋立地と橋はさらに増加し、小倉の都市構造は大きく姿を変えた。現在の御神幸では江戸時代にはなかった川沿いの埋立地や昭和以降に建てられた比較的新しい橋を通っており、古い橋は使わなくなった。また、軍用地ではなくなった旧武家地内に侵入できるようになり、巡行路が引かれている。江戸・明治と比べると、巡行する範囲が大幅に縮小されたことがわかる。さらに、回り祇園においては一本道を往復するという形式で近年再び開催されるようになったが、これは長い道のりを巡行していたかつての回り祇園とは一線を画したものだと言える。

以上のことから、巡行路の変遷は旧城内の軍用地化や新たな橋の建設、使わなくなった橋の撤去、埋立地の増加などに影響を受けたことが考えられる。

### 3. 2. 八坂神社・御旅所と都市空間の関係性

次に、八坂神社と御旅所の変遷について、祇園社と関連のある地域である「三本松」、「鋳物師町」、「室町」について、時代ごとの変遷を図2にまとめた。

江戸初期まで、祇園社は三本松に位置していたが、細川忠興の命により鋳物師町に移転した。祇園社の移転後、高倉稲荷神社が鎮座する三本松は巡行の中継地点である御旅所として使われ、祭礼に関わった。このとき室町は小倉城の北の丸として使われていた。

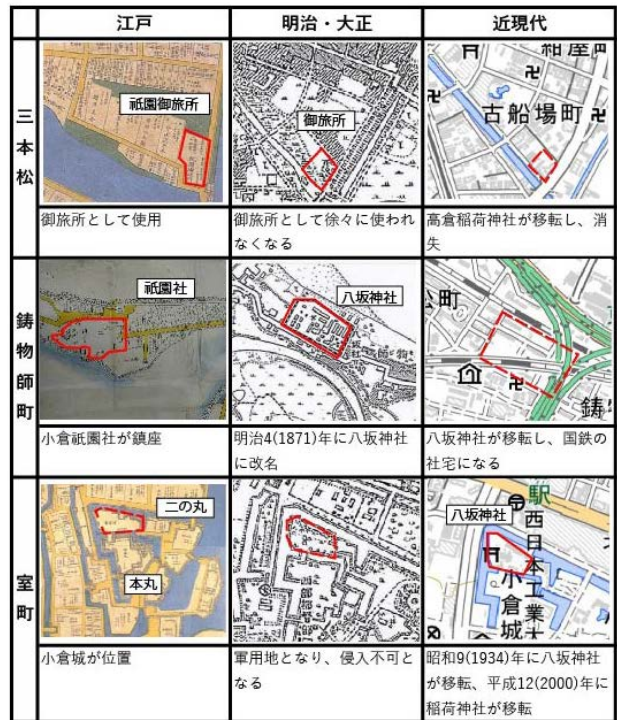


図2 八坂神社・御旅所の変遷<sup>註4)</sup>

明治時代には、神仏分離令により小倉祇園社が八坂神社へと改名したが、依然として鋳物師町に位置し続けた。巡行は規模を縮小していき、開催されない年も出てくるなど三本松の御旅所の位置づけは徐々に低下していく。また室町については小倉城であった場所が軍用地となり、祭礼との関係性が薄れていった。

昭和に入ると八坂神社が鋳物師町から現在と同じ場所である室町（小倉城内）に移転した。これは鋳物師町が煙害の影響を受けていたためとされているが、埋立地が増加し、そこに工場群が建設され、排煙を大量に放出したことが煙害を生み出したのではなかろうか。つまり、都市の変容が神社の移転に関与していることが考えられる。また鉄道が敷かれ、小倉駅が設置されたことで鋳物師町が中心部から分断され、巡行の際、行列が途切れるという問題が生まれたことも移転の理由とされている。その後、平成12(2000)年には三本松にあった高倉稲荷神社も八坂神社に合祀されたことで、鋳物師町と三本松はともに祭礼との関わりがなくなった。また、御旅所は1990年代以降、馬借町の経済的な理由や神社との関係の変化などから一定の場所ではなくなり、現在は神社などの宗教性を持つ場所とは関係なく、単なる巡行の中継地点となっている。

以上より、巡行路と同じく、八坂神社や御旅所の変遷も都市構造の変容に影響を受けていることがわかった。また、埋立地の増加が工業発展を促し、排煙によって神社の移転を発生させるなど、都市空間の変化が祭

礼に間接的に影響していることも考えられる。

#### 4. 小倉祇園祭からみた都市社会の変遷

##### 4. 1. 祭礼と商工業者の推移の関係性

祭礼に関わる小倉の人々の町ごとの特色を調べるため、「日本全国商工人名録」、「小倉商工人名録」、「商工名録」を用いて、明治24(1891)年、大正15(1926)年、昭和10(1935)年の商工業者数を業種別に町ごとにまとめ、分析した。

まず、小倉全体の業者数の推移について考察した。

商工業者の合計と商工が発達している町の数を時代ごとに表1にまとめた。明治から大正にかけて商工業者数が増加しており、小倉において商工が急速に発展したことがわかる。町数の推移においても増加の傾向を示しており、商工業者が住む範囲が拡大したことが考えられる。大正から昭和にかけては、全体の業者数が増加していな

表1 小倉における商工業者の推移<sup>註5)</sup>

町名	合計	町数
明治24年	78	17
大正15年	1726	49
昭和10年	1876	76

表2 大正から昭和にかけての都心部と郊外部の町の商工業者数の推移(一部抜粋)<sup>註6)</sup>

	町名	大正15年	昭和10年
都心部	京町	202	153
	馬借町	196	159
	魚町	127	126
	室町	122	105
	古船場町	116	97
郊外部	到津	7	23
	香春口		79
	富野		46
	赤坂		28

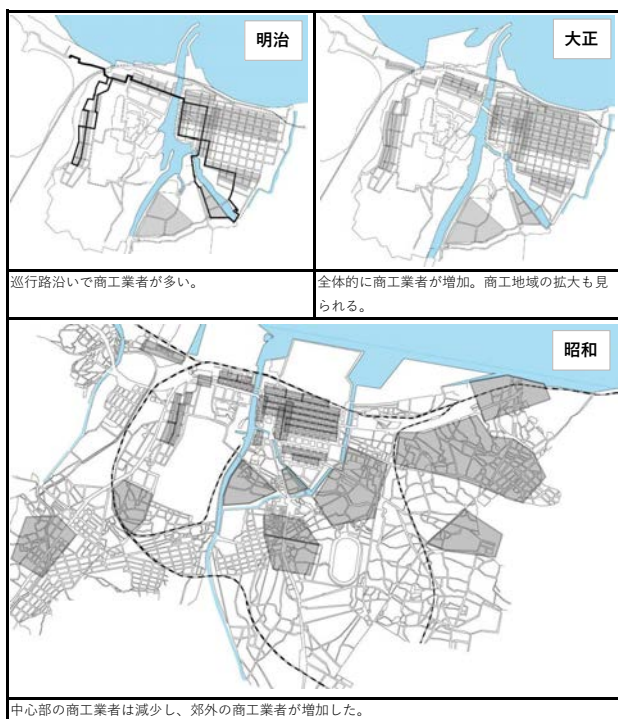


図3 小倉における商工業者の変遷<sup>註7)</sup>

いようにみられるが、商工地域である町数は大きく増加している傾向がみられ、商工地域が広範囲に拡大していることが推測される。

次に、より詳細な商工業者の動きを調査するため、町ごとの業者数の推移を確認するとともに、商工地域の拡大傾向をつかむため、各時代における商工地域の町域を大まかに示し、明治のみ巡行路を合わせて図3に示した。明治から大正にかけては小倉祇園祭に参加している中心部の町で商工業が発展しており、回り祇園ではこれらの町を通過するように巡行していることが分かる。一方で昭和に入るとその地域のほとんどの町で業者数が減少しており、都心部で増加したのは鍛冶町と博労町の2町しかない。また表2から、郊外部などの町で商工が発展していることがわかる。これは、郊外部が昭和に入ってから市街化され、都心部の業者が移り住んだためと推測される。商工地域の拡散が発生した結果、祭礼に関係する町が商工的に弱体化し、財政的に苦しくなり、祭礼に資金をあまり使わなくなったと考えられる。また、祭礼に関わる住民の移動により、祭礼の運営を担う人員が不足したことも推測される。これらの要因によって、巡行の範囲が狭まり、ついには回り祇園が消失してしまうなど、祭礼規模が縮小したと考えられる。

##### 4. 2. 商工業種に基づく各町の特色

次に、各町の商工業種について詳細分析を行なった。明治・大正・昭和の3時代を比較した際、どの時代においても業者数の上位5町は「京町」、「馬借町」、「魚町」、「室町」、「古船場町」であった。これらの町は、回り祇園の巡行路沿いにある町でもある。そこで、この5町に八坂神社が長い時間位置していた鑄物師町を加えた6町について、表3の馬借町の例のように各時代の業種ごとに業者数とその業種における全町の合計



図4 詳細調査した町域(明治)<sup>註8)</sup>

に対する比を全体比としてまとめ、業種とそれぞれの業者数から各町の特徴を考察し、表4にまとめた。

業者数が多い5町それぞれの特色として、京町は多種多様な商業が展開されており、馬借町は飲食が多く、次いで木材や鉄工業が多い、魚町は衣類・ファッション関連が多く、次いで食材関連が多い、室町は宿泊施設・飲食店が多い、古船場町は食材関連の店が多い

表3 昭和における馬借町の商工業種とその全体比<sup>9)</sup>

業種	業者数	全体比
米・雑穀・精米	12	10.2%
青物・果実・漬物	2	4.5%
鮮魚・蒲鉾	1	2.0%
麩・麺類	2	25.0%
和洋酒・醤油・味噌・	14	8.5%
砂糖・粉類	1	16.7%
菓子・餡・餡	7	9.2%
煙草	5	9.4%
織物・呉服	2	5.1%
洋服・羅紗	1	3.2%
衣類・古着類	3	60.0%
洗濯・クリーニング・京	3	15.8%
和洋雑貨・帽子・足袋	5	11.4%
小間物・化粧品・石鹸	2	9.1%
時計・貴金属・眼鏡	1	8.3%
和用家具	3	15.8%
建具・指物	2	11.1%
表具及材料	2	28.6%
墨	1	11.1%
陶磁器・漆器	3	23.1%
硝子	1	14.3%
荒物・世帯道具・柳行李	4	23.5%
諸機械・工具・メタル	1	4.3%
諸金物・地金・古鐵	4	13.3%
鐵工	2	5.4%
木材製材	15	30.6%
諸建築材料・石工左官	3	11.5%
薪炭・石炭・練炭製造	2	4.4%
石油諸油	1	5.9%
薬種塗料	5	13.2%
文具事務用品・和洋紙	3	16.7%
写真業	1	8.3%
漆器	1	16.7%
農具・肥料・種物・生花	2	28.6%
土木建築	4	7.5%
その他請負	2	14.3%
ゴム製品	3	27.3%
中立周旋	2	15.4%
保険	3	15.8%
運輸業	3	6.4%
自動車・自転車	2	7.4%
質屋	2	8.7%
貸金業	3	7.3%
旅館	3	8.3%
料理店	6	4.7%
飲食店	2	3.8%
席貸	2	20.0%
空き瓶・樽・古物	2	18.2%
印材・印判	1	16.7%
アース製造	1	100.0%
土地・家賃貸	1	7.1%

いことが読み取れた。このように、町によって業種が偏っていることから、町単位で大まかに集約されていることが考えられる。また、八坂神社の所在地であった鑄物師町は業者数が少なく他町と比べてあまり栄えていないため、町自体の財力はあまり高くなかったとみられる。一方で、御旅所である三本松を管理していた馬借町は業者数が最多の時代もあり、商工業が常に栄えており、三本松が祭礼においてあまり重要な場所ではなくなったとされる大正以降に商工業が発展したことから、馬借町は財力があつたことを理由に御旅所の管理を担っ

表4 町ごとの業者数および割合とその特色<sup>10)</sup>

町名		明治	大正	昭和
京町	総数(割合)	18(25.7%)	202(11.7%)	153(8.2%)
	特色	小間屋商多い、業者数トップ	多様な商業、業者数トップ	多様な商業
馬借町	総数(割合)	5(6.4%)	196(11.4%)	159(8.5%)
	特色	工場多い	飲食多め、次いで木材・鉄工業が盛ん	業者数トップ、飲食・木材多め
魚町	総数(割合)	18(25.7%)	127(7.4%)	126(6.7%)
	特色	職種最多、呉服多め、業者数トップ	衣類関連多め	ファッション関連多め、次いで食材関連
室町	総数(割合)	3(4.3%)	122(7.1%)	105(5.6%)
	特色	宿・銀行	宿・飲食多め	宿・飲食が減る
古船場町	総数(割合)	2(2.9%)	116(6.7%)	97(5.2%)
	特色	油製造のみ	食材関連多め	食材関連が大半
鑄物師町	総数(割合)	0(0%)	14(0.81%)	8(0.43%)
	特色		鉄工業、荒物商、硝子	食材、製造業

ていたのではないと推測される。

以上のことから、馬借町や鑄物師町は町の財力によらず祭礼に関わってきた一方で、回り祇園の巡行路沿いにある町は商工業が発展しており、町の財力によるところをうかがわせる。商工業者の郊外部への移動が、財力の減少や祭礼の担い手の減少など、祭礼縮小の要因を生み出したと考えられる。

## 5. 結論

本研究では、小倉祇園祭を対象に、その変遷と小倉の都市構造の変容を読み取り、両者の相互関係について考察した。その結果、軍用地や橋、駅および線路などの空間的な要因と明治維新以降の近代化による社会的な要因によって小倉祇園祭の巡行路および八坂神社、御旅所の所在地や運営方針などが変化してきたことがわかった。よって、都市と密接に関係した都市型祭礼は都市構造の変容に影響を受けて変化するという関係性を持つことが明らかとなった。

今後の課題としては、各町の商工およびその他の特色と祭礼の相互関係を詳細に分析し調査すること、また、本研究では調査対象を小倉祇園祭のみに限定して行なったが、他の都市型祭礼を対象とし、本研究では見られなかった祭礼変化に関わる都市の要素および両者の関係性などを調査することなどが挙げられる。

### 【補註】

- 註1) 参考文献9)  
 註2) 参考文献3)、4)、5)、6)、7)をもとに地図を作成し、参考文献8)、9)、10)をもとに巡行路、武家地、軍用地、説明を加えた。  
 註3) 参考文献2)  
 註4) 参考文献4)、7)、11)、12)の一部を加工して作成し、参考文献8)、9)、10)をもとに説明を加えた。  
 註5) 参考文献14)、15)、16)をもとに作成。  
 註6) 参考文献5)、14)、15)、16)をもとに作成。  
 註7) 参考文献3)、4)、5)、6)、7)をもとに地図を作成し、参考文献6)、9)、14)、15)、16)をもとに巡行路と町域を示した。  
 註8) 参考文献3)、4)、5)、6)、7)をもとに地図を作成し、参考文献6)、9)をもとに町域を示した。  
 註9) 参考文献16)をもとに作成。  
 註10) 参考文献14)、15)、16)をもとに考察し、作成。

### 【参考文献】

- 松浦健治郎「巡行型祝祭における街路空間と祝祭空間の都市形態学的解説 日本三大曳山祭を事例として」(日本建築学会, 計画系論文集, 2015)
- 中野紀和「小倉祇園太鼓の都市人類学 記憶・場所・身体」(古今書院, 2007)
- 児玉幸多「豊前国小倉城絵図」(日本城下町絵図集, 昭和礼文社, 1980)
- 大日本帝国陸地測量部「一万分一地形図・小倉」(1898)
- 図書撰奨会「小倉市地図」(図書撰奨会発行所, 1935)
- 中野佐一郎「小倉新市街地図」(岸谷専次郎, 1913)
- 国土地理院ウェブサイト
- 北九州市立自然史・歴史博物館「小倉城と城下町」(海島社, 2020)
- 柏木實「小倉祇園祭の成立と展開〜回り祇園を主として〜」(研究紀要5, 北九州市立歴史博物館, 1997)
- 北九州市立教育委員会「北九州市文化財調査報告書 第158集 小倉祇園太鼓」(2018)
- 「小倉城外町屋敷之図」
- 「小倉藩土屋敷絵地図」
- 小倉祇園太鼓400周年行事実行委員会「小倉祇園太鼓 国指定重要無形民俗文化財」(毎日新聞西部アシスト, 2019)
- 「日本全国商工人名録」(日本全国商工人名録発行所, 1892)
- 「小倉商工人名録」(小倉商業会議所, 1926)
- 田代峻「商工名録」(小倉商工会議所, 1936)
- 吉岡成夫「北九州雑考」(松ヶ江郷土史会)
- 北九州市小倉北区役所まちづくり推進課「小倉城下町調査報告書」(1997)